

暁鐘の音

119

高齢化と技術

日本は、技術大国だと多くの人は思っている。私も、ある面ではその意見に賛成である。だが、問題は、その技術をどこに使うかである。日本は、その持っている技術力を「民生品」というところに展開し、それらを安く作ることで世界に貢献してきた。確かに、世界中に「便利」を提供してきた。

年齢を気持ちだけ後ろに下げただけで、「定年」がもたらす影響を考えると、定年というダムが近づいてきたというだけで、企業の中で自らの学習目標を見失ってしまうし、その意欲も萎えてしまう。組織も、彼らを含め、自由以外にできることは命がけである。そして高齢者にたいしても、同じ視線、つまり「施しの視線」で政治が行われている。

一方で、急速な高齢化に対する警鐘が鳴らされて久しい。人口に占める高齢者の比率の上昇が、世界に例を見ない程のスピードであると言われている。そのうえ、少子化が重なっているから大変だという。だが、見ていると、高名な人たちが、次々とその高樓に登って鐘を敲いているだけである。現状は、まるで氷河の上に乗っていて、このままでは何年後かに、確実に崩れると分かっているのに、警鐘を鳴らすだけで流れを止める方法を提案することもしないし、氷河から降りる工夫もしていない。

人は、社会との接点を無くせば生きる意欲は失われ、途端に病人になってしまう。そういう人は、私の家の周りにも何人も居る。年をとっても、社会や人の役に立っているという実感が得られることが、生きる力になるのである。高齢者を「福祉」という観点で見ようとしていない姿勢は間違っている。それでは負担ばかり増えてしまっている。自分が社会の負担になっていくと思うだけで、生きる意欲は失われる。そのような社会は、生まれてきて良かったと思える社会ではない。そこで生活してきて良かったと思える社会ではない。

具体的に言つと、高齢化が迫っていると分かっているのに、そして、これからは高齢になっても仕事を続けられるようにしなければならぬと分かっているのに、「定年」というものを廃止しようとしていない。制限

本人が納得するまで「自立」を手助けする仕組みがあることが、豊かな社会の証拠である。数年前に「定年」を迎えた人で、この国の豊かさを感じている人は、どれだけいるであろうか。六〇年を振り返って、虚しさを感じない人が、どれだけ居るだろうか。日本の経済の復興のために、家庭をも犠牲に

して働いてきた人たちが、「定年」というダムから放り出されたあとには見向きもされない。年金はそれなりにもらえるかも知れないが、役割がないというのは、残酷な話である。

この国の今の状態は、「健康者が健康者のために運営している社会」であると思っている。それが良いと言っているわけではない。障害を持った人にとっては、まったく生きにくい社会であると言っているのである。車イスで、自由に外にできることは命がけである。そして高齢者にたいしても、同じ視線、つまり「施しの視線」で政治が行われている。

確かに、年をとれば五体は満足な状態ではなくなる。目や耳は弱ってくるだろうし、手足も不自由になってくるだろう。そうなった途端に、世話をす対象となってしまう。あなた達は世話をされる側だから、ぜいたくを言わ

ない、言われてしまう。本人にとつて、これほどの屈辱はないだろう。だが、健康者の社会は、その声を聞き取れない。

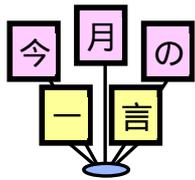
豊かな社会とは、お金持ちの社会と違うわけではない。それぞれの人が、社会の中で孤立していかないことを実感できる社会である。自分が希望すれば、社会や人の役に立つ機会を得られる社会である。そこでは、厳密なコスト計算は必要ない。「富の分配」が、それを支えることになる。

そしてもう一つ、彼らの自立を支援するのが「技術」である。見えなくなった目を補い、失った手足を補い、動けなくなった人には、移動手段を提供する。アメリカには、手足はもちろんだらう、口の筋肉まで動かなくなった人が、目だけでキーを打って、企業の重要な役割を担っている人がいる。元々は、軍事技術だそうだが、本人が望む

かぎり、それを支援する機器が無償で提供される。一万ドルから三万ドルもする機材が、無償で提供されるのである。

移動が困難な人には、インターネットが、世界との接点を提供する。そこから、「自分」を発信し、社会との間で接点を持つことができる。同じ場所にいなくても、「共同作業」は可能であるし、「連帯」はできる。

これまで、日本の技術は、人が使う「物」に活かされた。これからは、人そのものを支えるところにも活かす必要がある。その時、人は、技術の有り難さ、素晴らしさを実感するだろう。そして、高齢であること、障害を持っていることを恥しることなく生きるだろう。人間が人間としての誇りをもって生きる。技術はそれを支援すべきである。



NASAのスペースシャトルも、その前のアポロ計画も何度が失敗している。その他の土星や金星など

「失敗したことを次に生かす発想が常に必要なんです」 毛利 衛(宇宙飛行士)

返そうとしている。

どに向けた人工衛星でも、連絡が取れなくなったりしている。それでも、連続して失敗していかないし、その後の打ち上げは、その分だけ強くなっているように思われる。トラブルで打ち上げを延期したときの対応も、過去の失敗の経験が活かされているように思われる。

失敗を次に生かす発想というのは、誰でも、基本的には持っている。受験に失敗した場合なども、次回に生かして再挑戦しているだろうし、仕事で客先との対応をミスしたときも、そこから何かを学び取って、次には失敗しないようにする。猿でも、それはできない。それらに共通するのは「個人」である。

今、この国においては、失敗が

次に生かされていない場面を数多く目にする。H2Aは言うまでもないが、それだけではない。金融問題でも、結局、何も学習していないし、政治と献金の問題も、あれほど仲間が痛い目に合っているのに、またぞろ繰り返そうとしている。

どうやら、本当の原因を論理的に分析し、行為と結果の因果関係を明確にする能力が欠けているのではないだろうか。「個人」では出来るのに、「システム」となった途端に出来なくなってしまうのは、システムを構成する「プロセス」が理解できていないからだろう。